



馬 耳 東 風

九州に新たに潜伏キリシタン関連世界遺産が追加された。カトリック信者の作家遠藤周作は、日本のキリスト教受容を追求し、同伴者イエスという独自の認識を展開した。代表作「沈黙」から長崎県外海町の海を望む眺望豊かな丘に記念碑が建てられ、キリシタン禁制の苦難が濃縮されている。映画化され、踏み絵と目を覆いたくなる拷問で「転び」を迫る。キリスト教が伝来、禁教令からやがて鎖国となり弾圧は強化された。信徒発見150周年は、新観光百選の地に記念碑が建った。

「今、牛が何頭見えましたか？」「この木はザボンと言います。実が落ちるとどんな音がするでしょう？」島の丘や海辺を巡る車窓会話だ。こんな問い掛けがぼんぼん飛び出す五島列島福江島のオバサンガイドだ。JAのお客さんは、牛の数を1, 2, 3, 4…と丁寧に数えたとその真面目さを披露し、ザボンの実の落ちる音はドスンだと答えたそうだ。ガイドさん曰く、「牛は5頭で、実の落ちる音はザボン」だと。ギャグに気付いて思わず拍手。「キリスト教関連遺産」として注目の列島を訪問時の話だ。漁師の娘だと自信満々に機敏さと骨太の力自慢を見せてくれた。親に感謝していますと楽しみながら打ち込む。島へUターンし、鍛えた巧みな話術で客を引き付ける。さすがに大阪仕込みのおしゃべりは尽きない。産業の構造や生活の利便性から島の人口は流出し以前の半分になったと。過疎地の窮状は見るに耐えない。耕作放棄地と山林の管理不足で獣害も深刻だ。島の牛乳は濃厚

でとても美味しいからと飲んで確かめ、肉は黒毛和種で野草をたっぷり与えるので自然の恵み十分ですと付け加えた。地場産の食材は、しっかりメニューに書き込み、宿では五島うどんと一緒に「この卵は初産です」と小ぶりの赤玉が出されるおもてなしが素晴らしい。

陸と海の十字路、中通島の日の出と入りは見事だ。東京からIターンの男性ガイドさん。自分から愛称を披露し一生懸命地域に溶け込む熱意の塊だ。海上タクシーで若松島の断崖キリシタン洞窟を経て久賀島の五輪教会を訪ねた。2世帯4人の信者が守っていた。船が着くのを待ちわびたように迎える女性が顔を見せた。往時は缶詰工場で大いににぎわったとか。奈留島の誰も居ない校庭に立派な廃校記念碑が建っていた。明治の学制発布にあわせた開校日が刻んであった。俺たちはここで学び育ったのだと自己主張する新しい碑は目立つ存在だ。

五島列島はかつて大陸に先進文化を求めた遣唐使船が立ち寄り、近世はキリシタンが迫害を逃れて潜んだ地だ。貴重な教会の数は多い。140余島あり、人が住むのは18だと聞かされた。福井の東尋坊と並ぶ大瀬崎断崖の灯台はしっかり東シナ海を見守っている。教会を軸に据えた信仰の地であり、踏み絵の苦難に耐えた人々の熱い信仰心が宿った神聖な場所だ。自然エネルギー豊かなエコの島が、島人の苦難の歴史に耐えた確かな祈りの島であることを忘れてはなるまい。世界遺産への登録が、信仰に基づく評価であり、深いところにある心の在り方に通ずるからだ。(柏)